

春の育苗、田植え不要 省力化の効果大

# 「初冬直まき」に熱視線



稲作の「初冬直まき」の作業を見学しようと開かれた研修会。車体の後ろに直まき用の機器を取り付けたトラクターが、田を耕しながら種と肥料をまき作業を実演した＝関川村上野新

岩手大が研究・実践

## 関川で技術学ぶ研修会

【農業】コメ栽培の作業分散や省力化につながる新たな農業技術として、「初冬直まき」が注目を集めている。雪が降る前に田に種をまき、春の育苗や田植え作業が不要になるため、大幅な作業量減が見込める。関川村で開かれた研修会には、約100人の農業関係者が参加し、熱心に新技術を学んでいた。

関川村上野新にある農業生産法人「上野新農業センター」の水田などを会場に、JAにいがた岩船が17日に主催した。

同法人では47・8畝を耕作しており、春に田植えなど作業が集中するのが悩みだった。岩手大が初冬直まきを研究・実践していることを知り、2021年冬から取り組みを続けてい

初冬直まき研究会  
入会希望者を募集  
岩手大、会費無料

岩手大農学部作物学研究室が事務局を務める「初冬直まき研究会」は、会員を募集している。入会する

る。大島毅彦社長(50)は「初冬の作業なので比較的手がすいたタイミングで種まきができ、春は田植えをしなくていいので楽になった」と話す。

研修会では、わせ品種「つきあかり」の作付けを見学した。ヤンマーアグリジャパンが作業に協力。担当者が「スリップローラーシート」と呼ばれる機器を付けたトラクターに乗り、田を耕しながら、殺菌剤で処理した種と肥料を同時にまいた。参加者は動画を撮影するなどして実際の作業を確認していた。

県内で初冬直まきを研究している農研機構中日本農業研究センター上越研究拠点(上越市)の大平陽一さん(51)が講師を務め、栽培

と、初冬直まきに関する最新情報の提供を受けられるほか、専門家からアドバイスが得られる。

会費無料。QRコードから、問い合わせや入会手続きができる。



技術について説明した。大平さんによると、まいた種は地中で越冬させ、翌年春に発芽し、通常の稲作と同様、秋に収穫できる。ただ、春に育苗箱にまいたり、田に直まきしたりするよりも出芽率が低いため、苗を確保するためには種を多くまく必要がある。生育途中で雑草が出やすいので、きめ細やかな管理が重要だという。

研修会の中で、岩手大農学部の下野裕之教授(50)は初冬直まきの研究について講演した。「日本の農家は15年で半減。1戸当たりの農家が耕作する面積が増える中で、春に作業が集中しすぎて手が回らなくなる場合がある」と指摘した。

種をまく時期や種をまく深さ、適切な除草など、適切な作業ポイントを把握することをアドバイス。その上で、「まだ開発中の技術。農業技術の一つとして習得すると、冬に作業を分散できて経営に幅が広がる」と話した。

※新潟日報 令和5年11月29日付  
新潟日報社の許諾を得て掲載しています  
※無断転載・複写を禁じます